

約2500年前の中国では、諸子百家の論客が活躍し、後の中国と東南アジアの思想や政治体制を模索・確立した。春秋戦国時代のことだ。その中で徹底的にもまれ、後世に名を残した儒家・孔子の目指したものは「経世済民」である。当時と異なり、社会や経済活動の重心が都市に移ったものの、農業の使命と役割は損なわれることはなく、むしろ大きくなっていく。

知恵と汗の結晶

グローバル化時代の今、国力の大本として農業を広い視野で見つめ、その果たす大きな役割、課題や明と暗を冷静に評価することが

国力としての農業

論点

安心生む“食の保障”

気象コラムニスト 高津敏



たかつ・はやし 1950年福岡県生まれ。北海道大学水産学部卒。東海水産の巻き網漁船・東海商船の航海士として世界の海をめぐる。89年に気象情報システム株式会社を設立し、代表取締役役に就く。

らすものともなる。激しく変化する気象から目が離せない。わが国農業は、こうした風土で知恵を絞ってきた先祖の汗の結晶である。里地や里山は人の暮らしとの融和から適度に整えられた景観を持ち、生物多様性を維

適正な評価必要

多くの村落はまさに荒れなんとしている。国家の基本は、国民に十分な衣食住を提供し保障する力にある。衣食足りて後顧の憂いなく、人々が元気に今日を生き明日を語り仕事に精を出すことで、地域の秩序が保たれる。これが食料自給率を向上させる地産地消の本来の姿であり、その大切な役割を担っているのは農地と農家、JAなどの組織や食品会社や流通業である。経済活動の目的は雇用と利益の創出であり、わが国の自給率を上げるには、農産物価格が適正に評価されることが第一である。国民の理解と納得のいく農業を守り、農業収入で報われることで後継者が育つ。結果、国民が安全で安心できる食を求めることができ、海外の安価な食品に頼る必然性は少なくなる。近年、世界貿易機関(WTO)交渉、自由貿易協定(FTA)や経済連携協定(EPA)の締結をめぐる、国内農業には輸入自由化の危機感が募っている。外交の弱腰は許されない。

重要だ。

日本列島は、世界で最も美しい四季がめぐり来る。それに伴って貴重な自然に恵まれている。また、四囲には広大な海洋があり、暖流と寒流の恩恵で豊穡(ほらじょう)な海洋生物資源

を持つ。一方、急峻(きゅう)な山が海岸近くうしゅんしゅんとして、梅雨や秋雨前線、台風が春一番、集中豪雨やゲリラ豪雨に伴う暴風・大雨、さらに豪雪

が次々に襲撃する。春と秋には、大陸から東進してくる高気圧の後の低気圧の発生から発達・消滅、雨ともなれば、災害をもた

持ってきた。しかし今、その里地、里山の農村地域は急速な高齢化・後継者不足に見舞われている。農家が減る一方で、イノシシ、猿、シカなどが増える。農作物の鳥獣害はひどくなるばかりで、

産物直売所などを生産者と消費者の交流の場として、国民が農業を支える仕組みをさらに強固にする努力や情報公開が重要だ。子どもに未来を託せる農業こそ国力の源である。